

〈論文〉

日本の中学・高校社会科教科書の 「第三世界」記述に見るラテンアメリカ像

志 柿 光 浩 (東北大学)

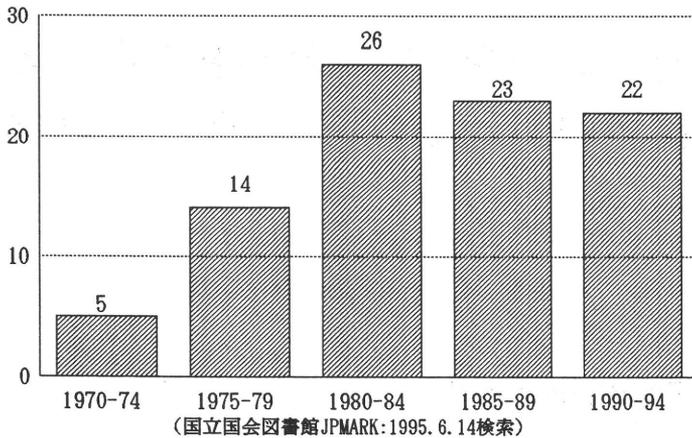
1. 調査の目的と背景

日本の言論界で、「第三世界」という言葉は依然ポピュラーである。図1は、1970年から1994年までの25年間に日本で出版され国会図書館に納本された書籍のうち、「第三世界」という言葉を書名あるいはシリーズ名に含むものの数を5年毎に示したものである。

本稿のテーマは、この「第三世界」という語が、現在の日本の学校教育の中でどのように教えられているのか、そして、「第三世界」の記述においてラテンアメリカはどのように扱われているのか、これら二つの問いに答えることにある。

筆者がこのようなテーマを取り上げた背景の第一には、「第三世界」という用語に対する素朴な疑問がある。ラテンアメリカに関する授業の中で、筆者自身も「第三世界」という言葉を使うことがあるが、自分自身どういう意味で使っているのか必ずしも整理できないでいた。また、学生の間には「ラテンアメリカ=怖いところ、遅れたところ」というイメージが根付いていると感じられることがあり、ラテンアメリカを「第三世界」の一部として扱うことで固定的なイメージができあがってしまうことに一因があるのではないかという疑念も生じていた。さらに、冷戦構造の崩壊にともなういわゆる「第二世界」が消滅し、「第三世界」という概念を使い続ける

図1. 「第三世界」を書名に冠した書籍出版件数
(国立国会図書館に納本された日本語書籍)



ことに対する抵抗感は一層強まった。そのような中で、中学・高校の社会科教科書を収集する機会があり、「第三世界」という概念がどう扱われているか見てみたところ、教科書によって扱いに大きな違いがあることを知り、詳しい調査の必要を感じたというわけである¹⁾。

また、本調査のもう一つの背景として、「地域の総合的理解」という地域研究の目標の達成に、地域事情教育の領域からの貢献を望めるのではないかという期待がある。

一般に教育とは、さまざまな学問研究の成果を背景とした総合の作業である。学校教育の現場で教師は、アジアやラテンアメリカなど、多様で複雑な内容を持つ地域の社会と歴史を簡潔に捉えて、生徒に分かり易く伝えるという仕事を担っている。これは、まさしく総合の作業にほかならない。例えば中学生なり高校生に、「〈第三世界〉とは何か？」あるいは「ラテンアメリカは〈第三世界〉なのか？」と聞かれた時にどう答えるか。研究者の間では「微妙な問題があって一概には言えない」と答えるのが正しいのかも知れない。しかし中等教育の現場では、細かいところを割り切って世

界を説明する必要がある。地域研究に求められている「総合性」とは、実はこの「割り切って世界を説明する」ということなのではなかろうか。地域研究者は中等教育の教育現場における「世界の割り切り方」から大いに学ぶべきであるし、また逆に、その「世界の割り切り方」が適切か、問題点はないのか、注目していく必要がある。また、公的な教科書の記述における事実関係やバランスについては、研究者の団体である学会としても関心を持つべきであろう。

このような背景から、日本の中学校、高等学校で使用されている教科書における「第三世界」記述と、そこでのラテンアメリカ地域の位置づけについて調査を行った。だがその結果について論じる前に、まず、一般に「第三世界」という語はどのような意味で捉えられているのか、また、実際に学生達はどうか捉えているか、予め検討しておくことにしよう。

2. 「第三世界」の一般的な用法

「第三世界」の一般的な用法というのは、実は確定できない。このことは、今回の一連の調査を通じて改めて実感させられたことである。「第三世界」の定義を明らかにしようとする論者には、「第三世界」の意味するところの曖昧さや欠点を認めながら、非先進地域を指す言葉として他に「よりましたな」用語がないとする者が目立つ²⁾。

「第三世界」という語の使用の是非についても、極めて対照的な考え方がある。例えば1980年代、ジョン・リーという論者は、「第三世界」という用語を使うことは、日本を含めた「先進国」側によるアジア、アフリカ、ラテンアメリカの諸国の歴史と文化を奪う意味を持つ、と批判している³⁾。一方、ほぼ時を同じくして小田実は、「第三世界」という用語には、開発主義を否定し、非先進地域の変革を目指す意志が込められているとして、「第三世界」という用語の使用を称揚している⁴⁾。いずれの論者も、先進国側ではなく「第三世界」という用語が指している地域の側に立とうとする点では共通しているのだが、「第三世界」という用語に対する立場は対照的なも

のとなっている。

このような中で、何らかの基準的な定義を求める一つの常套的な手段は、辞書の与えている定義を参照することであろう。「第三世界」の定義として『広辞苑』（第四版）では、「アジア・アフリカ・中南米などの発展途上にある諸国を、東西両世界に対して、或は米ソ二大国及びこれに次ぐ先進諸国に対して呼ぶ称」と記している⁵⁾。また「第三世界」に関する著作の多い西川潤は、平凡社版『世界大百科事典』の「第三世界」の項において、次のような説明をしている。

…〈第三世界〉の内容についてはさまざまあり、欧米ではアメリカ、西欧諸国の先進国を〈第一世界〉、ソ連、東欧の後から発達をはじめた国々を〈第二世界〉、そして熱帯、亜熱帯の旧植民地・従属国で最近独立した国々を〈第三世界〉と呼ぶいい方もある。70年代初めには中国が〈三つの世界論〉を提起した。この議論によれば、ソ連、アメリカの超大国が〈第一世界〉、西ヨーロッパ、日本が〈第二世界〉、そして発展途上諸国が、歴史的に第一・第二世界に支配されてきた〈第三世界〉ということになる。このように論者によって、三つの世界の内容はそれぞれ異なるが、いずれにしても〈第三世界〉はアジア、アフリカ、ラテンアメリカの発展途上国を指していることに変わりはない…⁶⁾

一方、英語の“Third World”の用法についての*The Oxford English Dictionary*の定義は次のようなものである。

特にアフリカとアジアの、共産ブロック、非共産ブロックのどちらとも同盟関係にない世界の国々のこと。これに由来して、世界の中の低開発諸国、より貧しい国々、通常、アフリカ、アジア、ラテンアメリカの国々の意⁷⁾

この定義で注目されるのは、「第三世界」はもともとアジア、アフリカの非同盟諸国を指すのが原義であり、それがラテンアメリカも含めた低開発地域全般を指すような意味で使われているようになったとしている点である⁸⁾。

以上のような辞書あるいは百科事典の定義の検討から、「第三世界」という概念は次のような内容を含み得るといえる。

- ・東西両陣営、あるいは米ソ二大国とこれに従属する先進国がなす二つの世界とは異なる第三番目の世界
- ・先進地域とは対照的な地域、非先進地域
- ・具体的には日本を除いたアジア、アフリカ、ラテンアメリカの地域
- ・アジア、アフリカの新興独立国が構成する勢力

3. 日本の大学生の世界認識における「第三世界」とラテンアメリカ

次に、日本の大学生達は「第三世界」という概念をどう理解し、また、その「第三世界」理解の中でラテンアメリカをどう位置づけているのか見てみることにしよう。

1990年4月A大学、1993年4月B大学、1995年4月C大学で、学生に対して次の二つの質問を行った。

【設問1】 第三世界とは何か、できるだけ簡単明瞭に定義せよ。

【設問2】 仮にラテンアメリカ及びカリブ地域が第三世界に含まれ、同時に、他の第三世界の地域と異なる点を持つとした場合、どんな点で異なると言えると思うか。

なお、A大学は教養課程の政治学科目の1年次生を主とした受講者、B大学はスペイン語学科の2年次以上の学生で「ラテンアメリカ史概論」ならびに「ラテンアメリカ現代史」科目受講者、C大学は第2外国語としてのスペイン語科目の1年次生を主とした受講者が対象であった。

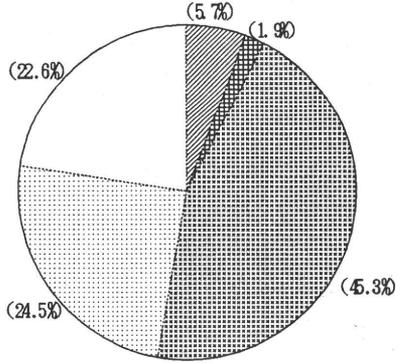
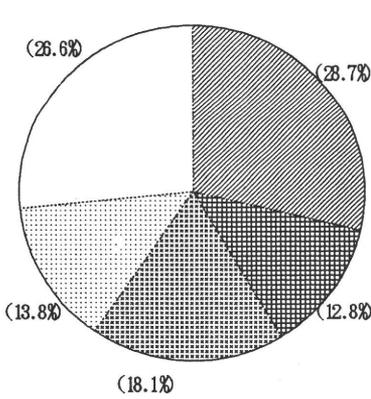
(1) 学生の「第三世界」理解

自由記述形式の回答であるため厳密に分類することは難しいが、前節でみたような辞書的な定義を参考に、【設問1】については、「世界を三つに

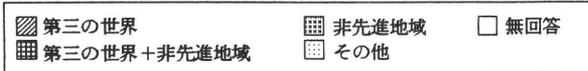
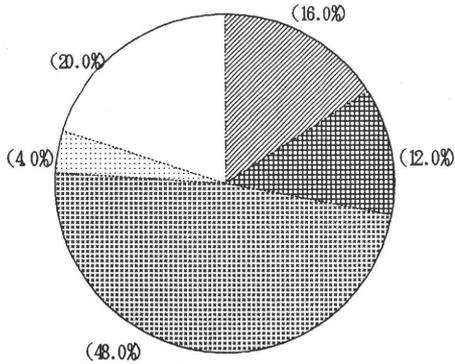
図2. 日本の大学生の「第三世界」理解

1990年 A大学 (回答数94)

1993年 B大学 (回答数53)



1993年 C大学 (回答数25)



分けた第三番目の地域という意味での第三の世界」という定義と、「発展途上地域、後進地域、貧困地域などといった先進地域に対する対立概念としての非先進地域」という定義との二つのカテゴリーを設定して大まかに分類した。回答の中には、これら二つのカテゴリーの双方に含まれるものもあり、また、何れのカテゴリーにも含まれないと判断される定義もあった。まったく回答していないもの、わからないと答えたものも少なくなかった。

図2は、以上のような分類に基づいて、それぞれの大学での調査における【設問1】に対する回答の傾向を示したものである。

図から明らかなように、A大学における調査では「第三の世界」という理解が合計41.5%で、「非先進地域」という理解の合計30.9%を上回っている。ソ連ブロックの解体のさ中であり、東西冷戦構造の世界の中で大学入学までを過ごしてきたことによるものであろうか。B大学における調査では「第三の世界」という理解は限られており、合計47.2%が「第三世界」を「非先進地域」を指す言葉として理解している。C大学の場合にも、「第三の世界」という定義を行った者は合計28.0%にとどまり、「非先進地域」という理解が60.0%にのぼっている。

次に、実際の回答例(次ページ)を見てみると、「第三世界」を定義する際に、これを勢力を増しつつある世界と見る見方と、先進地域とは対照的に停滞していると見る見方とに大別できることに気づく。「第三の世界」とする定義を行った回答に前者の傾向が強く、発展途上地域など「非先進地域」とする定義を行った回答に後者の傾向が強い。

(2) 学生の「第三世界」理解におけるラテンアメリカ

【設問2】については、A大学94人中30人(31.9%)、B大学53人中39人(73.6%)、C大学25人中14人(56%)が回答した。この設問について模範回答というものは存在しないが、筆者自身はこの設問を設定するにあたって次の2点を念頭においていた⁹⁾。

【設問1】に対する回答例

- 「第三世界」に肯定的な意味を与えていると考えられる回答例
 - ・ アジア、アフリカ、南アメリカなどのこれから発展していこうとする国々のこと
 - ・ アフリカや中東の産油国など最近発言力を強めてきた国のこと、今までのようにその意見を無視できない。
 - ・ 西側にも東側にもつかないでまとまりはじめた国々
 - ・ 第二次世界大戦後に新たにでてきた勢力
 - ・ アジア・アフリカ・ラテンアメリカなどの発展途上国と呼ばれている国々で、植民地からの独立を果たし、個々の力はないものの数が多いため、ヨーロッパ、日本、アメリカなどを脅かすようになってきた国々
 - ・ 経済的にはまだ発展途上であるが地下資源が豊富でいずれその存在が大きく注目されるであろう国々
 - ・ 先進国に対し、中進国と呼ばれる工業国であり、この先進国に強い意見を言えるようになった国
 - ・ 昔は発展途上国と呼ばれていて、先進国からの援助を受け、これから政治的・経済的に発展を試みている国々
 - ・ 新しい、まだこれから何でもできる未知の可能性を含んだ世界
 - ・ 先進諸国と違い先進諸国が持っていないものを持ち、前向きに考えるならいろいろな可能性が残されている地域
 - ・ 技術開発が遅れたために列強の支配を受けてきたが最近発展が著しく、注目されるようになってきた地域
 - ・ かつて植民地とされ、最近になり台頭してきた国々。

- 「第三世界」に否定的な意味を与えていると考えられる回答例
 - ・ 経済面で先進国に遅れをとり、政治的にも不安定な国々のこと
 - ・ 資本主義先進国でもなく社会主義国でもない、その両方から見ても力のない国々
 - ・ 先進国、中進国に含まれない国々・途上国の中でも貧しい
 - ・ 経済的に貧しく、後進国と呼ばれる国々
 - ・ 遅れている国々・未開発地域・生活水準が低い国
 - ・ 比較的南半球に多い貧しい地域
 - ・ 他国から物質的・政治的援助が必要な国
 - ・ 重要視されていないところ
 - ・ 経済の成長が止まっている国々
 - ・ 人口増加や飢えに苦しみ、満足な生活もできず、男女差別、エイズ、教育など、社会的にも発展していない

(次ページに続く)

- ・発展途上の国々。特に経済的に貧しく、それに伴う食糧問題、人口増加、環境破壊が如実に現れている世界
- ・大航海時代以降、列強の支配下におかれ、列強に搾取され、今も貧困な状態にある国々
- ・経済的・物質的に貧しく、今でも自然（原生林）が残っているかのように見えるが、実は、環境破壊がかなり進んでおり、子供も働いている。
- ・科学技術が発展していて経済も豊かな国に属する人が、自分達以外の貧しい国々を指して言う。一言でいえば先進国の反対語である。
- ・日米欧の三大経済トライアングル圏から外れた後進地域
- ・社会主義国や先進資本主義国に較べて近代化の遅れている国
- ・経済的にも政治の安定という点でも先進各国にはるかに及ばない国々

●その他の回答例

- ・アジア・アフリカ・ラテンアメリカ
- ・主に赤道以南の国々（オーストラリアを除く）、特にアフリカ大陸のこと
- ・「先進国」を言葉として存在として成立させる為の対立軸としての言葉、あいまいな存在

【設問2】に対する回答例

A大学	B大学	C大学
<ul style="list-style-type: none"> ・人種の混血 ・白人の支配 ・民族的多様性 ・累積債務問題 ・日系人移民 ・独自の民俗文化 ・比較的先進国に近い ・米国の影響 ・世界の市場から遠い ・米国の援助 ・米国にとって重要 ・米国との対立 ・社会主義に近い第三世界 ・人口がそれほど多くない ・米ソ対立の舞台 ・資源が豊か ・地下資源より食糧供給地として重要 ・広大な土地 ・緑が豊か ・アジアに較べてまとまりがない 	<ul style="list-style-type: none"> ・スペインによる支配 ・独自の歴史・文化の尊重 ・人種的多様性 ・スペイン語圏 ・カトリック圏 ・経済大国の基盤になった ・米国との強い結び付き ・500年間にわたる言語・宗教面の文化的な侵略 ・キューバの社会主義 ・ヨーロッパによる征服 ・多様な民族 ・政治的に不安定 ・対外債務 ・スペイン植民地であったことによる共通度の高さ ・混血 ・先住民問題 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽観的 ・1800年代にほとんどが独立を達成した ・資源の面で潜在能力を持つ ・スペイン・ポルトガル語がほとんど ・アジアに較べて先進国の仲間入りを望んでいない ・戦争が少ない ・アフリカほど飢えていない ・インフレ ・観光産業が発達 ・貧困なわりに楽しそうにしている ・アメリカの前庭 [ママ] ・人種が複雑 ・多様すぎて答えられない

- ・アジア・アフリカ地域の多くの場合と違ってラテンアメリカでは、カリブ地域など一部の国々を除いて、既に19世紀初頭には政治的独立を達成していたこと。
- ・植民地期、共和政期を通じてラテンアメリカ地域は、西欧世界による支配地域というよりは、西欧世界の延長として形成されてきたこと。

実際の学生達による回答例（前ページ）を見ると、この設問は答えにくいものであったことが窺える。米国との関係、人種的・民族的多様性、豊かな資源といった点を指摘する回答が目立つ。B大学の調査での回答例に、スペイン植民地であったこと、スペイン語の使用、カトリックなどの指摘が目立つのは、回答者がスペイン語学科の学生であることを反映しているものと思われる。結局、先に掲げた筆者の考えている相違点については、C大学の学生の中に「1800年代にほとんどが独立したこと」と回答した者が1名見られた以外は、誰も回答していなかった。

学生を対象とした以上の調査結果から、次のような点を指摘することができる。

- ・かなりの大学生が、「第三世界」という語を知らない。
- ・東西両陣営に属さないという「第三の世界」としての理解よりは、「第三世界」=「非先進地域」という理解が強まる傾向にある。
- ・「第三世界」という概念を用いて世界を把握する際に、ラテンアメリカの持つ個性的特徴は認識されにくい。
- ・「第三世界」=「非先進地域」という意味で使われる際に、一方では「これから発展しつつある」と見る理解のしかたがあり、他方では「遅れている、貧しい」と見る理解のしかたがあって、使う者によって受け止めかたが異なっている。
- ・「第三世界」にラテンアメリカを含めずに理解している者もいる。

4. 日本の中等教育社会科教科書の「第三世界」記述におけるラテンアメリカ

以上の諸点を踏まえた上で、次に本稿のメインテーマである学校教科書における記述についての調査結果の分析に移ることにしよう。

(1) 「第三世界」記述の有無と「第三世界」記述におけるラテンアメリカへの言及

平成元年に改訂された新学習指導要領にもとづいて発行され、平成6年度に日本の中学で使用された社会科（地理・歴史・公民の3分野）の教科書計24種と、高校で使用された地歴科（地理および世界史）ならびに公民科（現代社会・政治経済）の教科書計44種を対象として、「第三世界」という語の記述の有無、ある場合のその定義、その定義の中でのラテンアメリカ地域の捉え方を調査した（本稿末尾、調査対象教科書一覧を参照）。なお、「第三世界」という用語とは別に、「第三勢力」という用語が幾つかの教科書では使われており、「第三勢力」のみが記述されているものはそのように分類した¹⁰⁾。

このうち、中学校社会科教科書についての調査結果を示したのが図3である。

図から分かるように、地理的分野では「第三世界」という語を用いたものはなかった。歴史的分野では8種中1種が「第三勢力」について記述しており、4種が「第三世界」について記述していた。この4種のうち3種で、「第三世界」にラテンアメリカを含めていることが明示的に示されていた。公民的分野では8種中4種が「第三勢力」という用語のみを用いており、2種に「第三世界」についての記述があった。うち1種がラテンアメリカを「第三世界」に明示的に含ませていた。

次に高校社会科教科書について同様の分類を行い、それぞれ何種ずつであるか示したのが図4である。また、高校教科書については各年度の採択部数が分かるので、分類の結果に採択部数シェアによる重みづけをして示したものが図5である。

図3. 中学校社会科教科書の「第三世界」記述
(平成4年検定済 平成6年発行のもの)

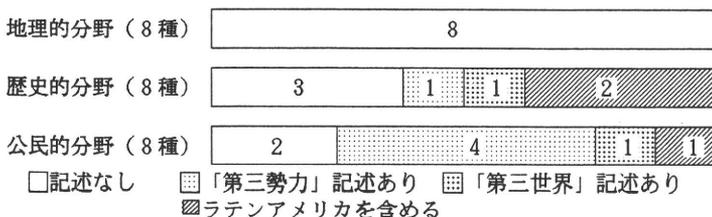


図4. 高校社会科教科書の「第三世界」記述
(平成5年検定済 平成6年発行のもの)

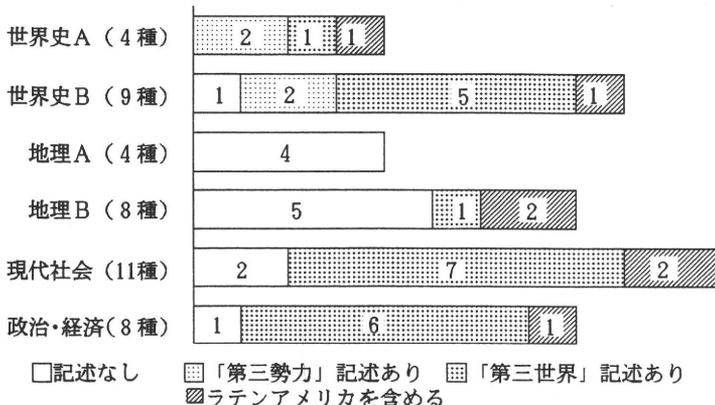
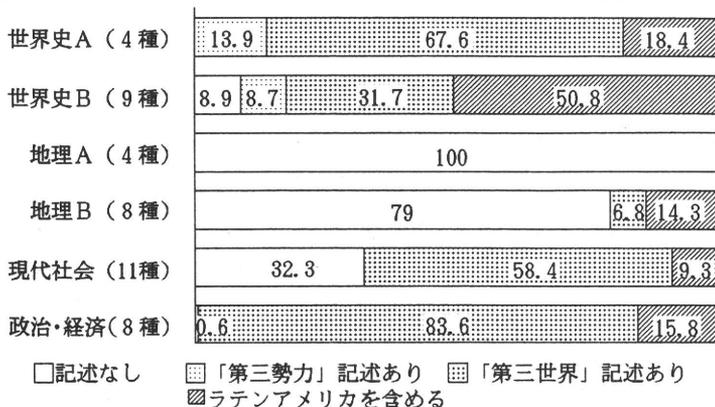


図5. 高校社会科教科書の「第三世界」記述
(採択部数のシェアで重み付けをした割合)



世界史の分野においては、世界史A 4種のうち2種が「第三勢力」、残る2種が「第三世界」について記述しており、世界史B 9種中2種が「第三勢力」、6種が「第三世界」について記述していた。しかし「第三世界」にラテンアメリカを明示的に含めて記述していたのは、世界史A、世界史Bそれぞれ1種ずつのみであった。なお図5の世界史Bの項で、「第三世界」記述にラテンアメリカを含ませていたものの割合が5割を越えているのは、そのような記述をしていた教科書1種の採択シェアが高かったことによる。

地理の場合は、学習指導要領の改訂により平成6年度から新たに発行の始まった地理Aでは「第三世界」、「第三勢力」いずれの記述も見られなかった。また地理Bでは、「第三世界」記述があったのは8種中3種で、そのうち2種が「第三世界」記述の中でラテンアメリカに言及していた。採択シェアを考慮に入れると、平成6年度に高校で地理を学習した学生の大半は、少なくとも教科書の記述からは、「第三世界」という概念を学習しなかったといえることができる。

現代社会の結果は図のとおり。政治・経済では「第三世界」の記述のないものが8種中1種あったがその採択シェアは小さく、政治・経済を学んだ学生のほとんどは「第三世界」記述に触れたことになる。しかし、「第三世界」に関してラテンアメリカを明示的に含めて記述していたのは1種のみであった。

以上、この調査の結果から次の2点が指摘できる。

- ・ 中学、高校を通じて地理の分野では「第三世界」の記述がないものが多い。
- ・ その他の分野では「第三世界」の記述のあるものが多いが、「第三世界」にラテンアメリカを明示的に含めて記述している教科書は少ない。

(2) 「第三世界」記述の具体的な内容

それでは、実際の記述はどのようなものになっているのだろうか。まず、

「第三世界」に関する記述でラテンアメリカを明示的には含めていない例から見てみよう（次ページ）。

【1-1】の例は、「第三世界」について論じながらラテンアメリカには触れていない場合の典型的な記述内容となっている。「大戦後のアジア・アフリカの独立国」、「バンドン会議」、「非同盟中立主義」、「東西両陣営のいずれにも属さない」といったことをキーワードとして「第三世界」が説明されている。ただこの教科書の場合、「第三世界」の説明の中ではラテンアメリカに触れていないが、「第三世界」を扱う項の中で「ラテンアメリカ」という小項目を立て、そこではキューバについて記述している。ラテンアメリカの位置づけは曖昧である。【1-2】も「第二次世界大戦後に独立した国々」という定義である。

【2-1】は「第三勢力」という用語を使った例ではあるが、【1-1】と同様に、「第三勢力」の定義ではラテンアメリカに触れていないのに、「第三勢力」の項目の中でラテンアメリカについての小項目を立てている。高校世界史の教科書では、「第三世界」という用語を使わず「第三勢力」について論じているものが多い。世界史A 4種のうち3種、世界史B 9種のうち4種が、この大戦後の国際社会の項目では「第三勢力」という用語を使っている。また、世界史A 1種と世界史B 5種が、全く定義を与えずに「第三世界」という語を使っている。これも高校世界史の教科書に特徴的なことである。

【2-2】では「第三世界」を「新興の独立国＝発展途上国」と定義している。ラテンアメリカの多くの国々は、これら三つの世界のどれにも属しないことになる。【2-3】【2-4】は、いずれも「大戦後独立したアジア・アフリカの新興国」という定義である。【2-5】ではアジア・アメリカに加えて「中央アメリカ」への言及があり興味深い。旧イギリス領西インド諸島諸国を指しているのだろうか。いずれにしても他のラテンアメリカ諸国は含まれていない。

次に、「第三世界」の説明にラテンアメリカを含めている場合の例を見て

教科書の「第三世界」記述例（下線は筆者）

- 「第三世界」記述でラテンアメリカに触れていないもの〈中学校社会科教科書〉

【1-1】「1955年、大戦後に独立を達成したアジア・アフリカの29ヵ国の代表は、インドネシアのバンドンに集まり、アジア・アフリカ会議（バンドン会議）を開いた。この会議では、平和5原則をさらにすすめた平和10原則が決議され、民族の独立と平和を誓いあった。これらの国々は、発展途上国であり、米ソいずれの陣営とも同盟を結ばない非同盟中立の立場をとったため、東西の両陣営に対して第三世界とよばれ、以後、国際的な発言力をましていった。」（教育出版『新版 中学社会 歴史』p.289.）

【1-2】「国々の人口や領土の大きさとは関係なく、工業が発達している主要工業国と、発展途上国を中心とする第三世界*1との間には大きな格差がある。*1 [第三世界] 第二次世界大戦後独立した国々の多くは、米ソどちらの陣営にも加わらず、力を合わせて行動し、発展途上国共通の利益を主張してきた。そのため、これらの国々は〈第三世界〉とよばれている。」（東京書籍『新しい社会 公民』pp.192-193.）

- 「第三世界」記述でラテンアメリカに触れていないもの〈高校地歴・公民教科書〉

【2-1】「3 第三勢力の台頭と平和共存 第三勢力の台頭 アジア・アフリカなどの独立国の多くは、米ソ両陣営のいずれにも属さない第三勢力として、世界史の形成に主体的に参加するようになった。…ラテンアメリカの反米民族運動 アメリカ合衆国の経済的・政治的支配下に置かれてきたラテンアメリカ諸国では…」（東京書籍『世界史B』pp.339-341.）

【2-2】「世界人口の3/4以上が発展途上国の人々である。これらの国々の多くは第二次世界大戦後に植民地から独立し、第三世界とよばれている。…[第三世界の脚注] 第一を先進資本主義国、第二を社会主義国とし、第三を新興の独立国＝発展途上国とよぶのがふつうである。もともとは、フランス革命のときに、それまでしいたげられ、抑圧されていた第三身分とよばれた民衆が新興勢力として登場してきたことにたとえられて、1950年代のはじめにフランスで使われたよびかたである。」（実教出版『地理B』pp.12-13.）

【2-2】「第二次世界大戦後、アジア・アフリカの植民地がつぎつぎに独立した。これらの新興独立国は、東西両陣営の対立に属さない非同盟中立の立場をとり、いわゆる〈第三世界〉を形成した。」（第一学習社『高等学校 現代

社会』p.177.)

【2-3】「アジアやアフリカの新興国は、発言力を強めるために、「第三世界」として団結した。そして、冷戦に巻きこまれないために、東西いずれの陣営にも属さない非同盟主義を掲げた。」(清水書院『新政治・経済』p.88.)

【2-4】「第二次世界大戦後、アジア・アフリカ・中央アメリカでは、民族解放運動が高揚し、欧米諸国に支配されていた植民地がつつつと独立した。しかし、多くの新興独立国は、経済的には自立できなかった。また、これらの発展途上国は、冷戦の中で、米ソのどちらにも属さない非同盟中立の立場をとり、第三世界(非同盟諸国)を形成するようになった。さらに今日、発展途上国は国際連合で多くの議席をもち、今までの欧米中心の世界観を変えつつある。」(第一学習社『高等学校政治・経済』p.12.)

■ 「第三世界」記述でラテンアメリカに触れているもの〈中学校社会科教科書〉

【3-1】「アジア、アフリカ、ラテンアメリカの新興諸国は、国際連合のなかで、米ソいずれの陣営とも同盟することなく、独自の立場で発言力を強め、東西二つの世界に対して、第三世界とよばれるようになった。」(東京書籍『新しい社会 歴史』p.305.)

【3-2】「1959年、ラテンアメリカではカストロの指導するキューバ革命がおきました。また、1960年はアフリカで、17の植民地が独立をかちとり、〈アフリカの年〉といわれました。これらの新しく生まれた独立国の多くは、米ソのどちらがわにも属さない中立の立場を守り、第三勢力(非同盟諸国)とよばれる勢力をつくり、国際政治に大きな発言力をもつようになりました。」(帝國書院『中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き〈最新版〉』p.309.)

【3-3】「1955年に、戦後独立した発展途上国を主とする29の国々が、インドネシアのバンドンでアジア-アフリカ会議を開いたが、それは、その後各国の独立をうながすナショナリズムの出発点となった。これらの発展途上国は、非同盟中立を主張する点で、先進資本主義国とも社会主義国ともことなるので、しばしば第三世界とよばれており、その範囲はアジア・アフリカはもちろん、ラテンアメリカ諸国にまでひろがっている。」(教育出版『新版 中学社会 公民』p.196.)

■ 「第三世界」記述でラテンアメリカに触れているもの〈高校地歴・公民科教科書〉

【4-1】「1950年代の特徴は、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの民族独立の動きがいっそう進展し、さらにこれら第三世界⑤を中心に冷戦に反対する非同盟主義が発展したことである。〔脚注〕⑤アジア・アフリカ・ラテンアメリカの発展途上国を総称して第三世界とよぶ。第一世界(先進資本主義)および第二世界(社会主義諸国)と対比して用いられた。発展途上国が大きな勢力として登場してきたことを背景として生まれたことばである。」(三省堂『明解 世界史A』p.147.)

【4-2】「19世紀前半、中部・南アメリカの諸地域では、アメリカ合衆国の独立運動に影響され、独立への気運が高まり、スペインやポルトガルから独立した。しかし、アジア・アフリカの地域が独立を達成するのは、第二次世界大戦後のことである。旧植民地から独立した国々は、第三世界の勢力として、世界政治に影響を与えるようになった。しかし、その多くは経済的には発展途上にあり、諸々の問題をかかえている。」(東京書籍『地理B』p.11.)

【4-3】「第2次世界大戦後、米ソを中心とする東西両陣営の対立のなかにあって、そのどちらにも属さず、非同盟中立政策をとった諸国を第三勢力とよびました。これらアジア・アフリカ・ラテンアメリカの国々には、現在では第三世界とよばれています。資本主義国家群を第一世界、社会主義国家群を第二世界とし、これらいずれの国家群にも属することなく、政治的・経済的自立を達成しようとしているのが、第三世界の国々になのです。」(山川出版社『現代社会』p.122.)

【4-4】「〔第三世界脚注〕西側の先進国を第一世界、社会主義諸国を第二世界とし、残りの発展途上国を第三世界とよぶ通称。しかし、中国は、米ソの二超大国を第一世界、東欧・西欧・日本・カナダ・オーストラリア・ニュージーランドなどの先進国全体を第二世界とよび、中国を含めて他の発展途上国全体を第三世界とよんでいる。また第三世界の国々は、一般に、熱帯・亜熱帯地方に多いため、〈北〉半球の先進工業国からみて、〈南〉側の諸国ともよばれる。〔本文記述〕第三世界の登場を、国際政治のなかではっきり示したのは、1955(昭和30)年のバンドン会議であった。それは、東西冷戦のなかにおいて、非同盟中立の立場に立つ国家を結集した第三勢力の形成へと発展する。国連において、これらの諸国は、アジアアフリカ＝グループ(A. A. グループ)として共同行動をとるようになり、アラブ諸国やラテンアメリカ諸国も時に連合して、70年代には総会の多数を制するようになった。」(一橋出版『政治・経済』pp.96-97.)

みよう。まず中学校歴史的分野の【3-1】では、「アジア、アフリカ、ラテンアメリカの新興諸国」という記述があるが、ラテンアメリカのどの国のことをさしているのか判然としない。先の【1-1】の例にもあったように、ラテンアメリカに触れる際にキューバに言及する教科書がいくつか見られるが、【3-2】もそうである。【3-3】では、アジア・アフリカの新しく独立した国々を中心に形成された第三世界の運動が、その後ラテンアメリカにも広がったという説明がなされており、この点ではいくつかの教科書に見られるような矛盾のある記述は避けられている。

次に高校教科書に目を向けると、【4-1】では【3-1】の場合と同様に、「ラテン—アメリカの民族独立の動き」という誤解を招くような記述がなされている。先にも指摘したように、高等学校世界史の教科書に、「第三世界」とラテンアメリカの関係が明確でない記述が多い。ラテンアメリカ諸国の独立に関しては、すでに19世紀を扱う部分で記述しているのでこれでいい、ということであろうか。

この点、【4-2】の例は、歴史ではなく地理の教科書でありながら、ラテンアメリカの多くの国々が、19世紀にはすでに政治的独立を達成していたという歴史的事実を明確に示している。ただし、「旧植民地から独立した国々」の中に19世紀に独立したラテンアメリカ諸国が含まれるとしたら、18世紀末にイギリス植民地から独立した米国も、同様に当然その中に含まれることになるはずだが、その点は判然としない。

【4-3】は「大戦後に独立したアジア・アフリカ諸国」という限定をせず、はじめからラテンアメリカを含めた定義を与えている例である。ただし、第一世界を「資本主義国家群」、第二世界を「社会主義国家群」と規定しており、資本主義でも社会主義でもない経済体制とはどのようなものを想定しているのか不明である。この点に関しては、前節でみた学生達による定義の中でも、同様のものが目だったが、それが教科書の記述の影響によるものかどうかはわからない。また【4-4】は、先に「第三世界」の一般的な定義を与えた上で、その形成の歴史的経過を説明しており、ラ

テンアメリカについても矛盾のない扱いになっている。

以上の教科書の記述の分析から、次のような点が指摘できる。

- ・教科書における「第三世界」の記述は、戦後のアジア・アフリカ諸国の独立と非同盟運動の形成に関連して見られることが多い。
- ・「第三世界」をアジア、アフリカの新興独立国に限定して記述している例が多い。ただしラテンアメリカを明白に除外しているのかわかしくは不明である。
- ・ラテンアメリカに言及していても、その多くの国々が、19世紀には独立していたことが分かりにくく、誤解を生みやすい記述になっているものが多い。
- ・非同盟運動におけるラテンアメリカの位置づけが不明確である。
- ・特に高等学校世界史の教科書に、ラテンアメリカの歴史的背景について誤解を生じやすい記述が多い。

5. 学習指導要領における「第三世界」とラテンアメリカ

周知のように日本の初等・中等教育で使用される教科書は、文部省の検定に合格して、はじめて発行される。検定は「教科用図書検定基準」に基づいて行われるが、これによると、教科書の扱う範囲及び程度について、「学習指導要領に示す事項を不足なく取り上げ、不必要なものを取り上げていないこと」が各教科共通の条件となっている¹¹⁾。したがって、前節で見た日本の学校教科書における「第三世界」記述およびそこでのラテンアメリカの扱いも、文部大臣の告示文書であるこの学習指導要領（以下「指導要領」）に準拠していることになる。日本の学校教科書の「第三世界」記述に上述のような傾向があるとしたら、その理由の少なくとも一部分は、「指導要領」に求められるといえよう。

しかし、「指導要領」は極めて簡略な文書である。「中学校指導要領」で地理、歴史、公民の3分野をあわせてA5版の印刷物の20頁、「高等学校指

導要領」で各教科それぞれA 5版2.5～5頁程度を占めるに過ぎない。具体的な点にまで触れられていないことが多いのは当然のことともいえる。ところで文部省は、「指導要領」とは別に『中学校指導書』（以下『指導書』）および『高等学校学習指導要領解説』（以下『解説』）という著作を発行しており、その内容は「指導要領」の簡略な記述を敷衍し具体化したものになっている。以下では、「指導要領」のほかにこれら『指導書』および『解説』の中で、「第三世界」あるいはラテンアメリカについてどう扱っているか、検討することにしよう。

(1) 中学校「指導要領」および『指導書』における「第三世界」とラテンアメリカ

少なくとも現行の中学校「指導要領」および『指導書 社会編』には、「第三世界」という語も「ラテンアメリカ」という語も見あたらない。ちなみに中学校「指導要領」には「ラテンアメリカ」はもとより「アメリカ」という語さえ、「欧米諸国」という用例以外には登場しない。

また中学校「指導要領」および『指導書 社会編』を通じて、「第三世界」やラテンアメリカに関連すると思われる記述は見あたらない。唯一、歴史的分野の「(9)現代の世界と日本」の項目の内容の取扱いについての解説で、「戦後の国際関係が、米・ソ両大国の対立から平和共存、そして多極化へと進みつつあることを理解させる」と述べているのみである¹²⁾。

(2) 高等学校「指導要領」および『解説』における「第三世界」とラテンアメリカ

【世界史】高等学校「指導要領」では、現代史に関して次ページのような項目を設定している¹³⁾。何れも戦後の世界の歴史を、米国とソ連およびそれらを中心とした国家群と、アジア、アフリカ地域での新興独立国家群の動向という枠組で捉えていることが窺える。「第三世界」という用語は用いていないにせよ、基本的には「米ソ+第三の世界」という理解に立脚しているといえる。しかし、そのような歴史認識の中でラテンアメリカ地域がどう位置づけられているのかは不明である。

世界史 A	世界史 B
(4) 現代世界と日本 ア 二つの世界大戦と平和 イ アメリカ合衆国とソビエト連邦 ウ 民族主義とアジア・アフリカ諸国 [以下略]	(6) 20世紀の世界 ア 二つの大戦と世界 イ ソビエト連邦と社会主義諸国 ウ アメリカ合衆国と自由主義諸国 エ アジア・アフリカ諸国の民族運動と独立

『解説』ではこれらの項目について、世界史Aで「これら新興独立国は、1959年代から第三勢力としてアジア・アフリカグループを形成」という記述が見られる¹⁴⁾。また世界史Bでは、「20世紀は、二つの世界大戦を経る中で、19世紀の国際秩序が崩壊し、社会主義諸国、自由主義諸国、アジア・アフリカの新興独立諸国を基軸とする複雑な国際秩序が形成された変動の時代である¹⁵⁾」、「1950年代に入ると、冷戦が進行する中でアジア・アフリカ諸国は第三勢力としての発言力を確立¹⁶⁾」などの記述がなされている。いずれも米ソ以外の第三の勢力をアジア・アフリカの新興独立諸国に限定しており、戦後の国際社会においてラテンアメリカがどう位置づけられるのか、触れられていない。前節で検討したように、世界史の教科書には「第三勢力」という語の使用が多く見られ、また「第三世界」という概念についてもアジア・アフリカの新興独立国に限定して説明しているものが多かったが、『解説』におけるこのような扱いが、教科書の記述に影響している可能性が強い。

【地理】「指導要領」『解説』共に、地理Aについては「第三世界」に関連する表現は見あたらない。地理分野において注目されるのは、「指導要領」地理Bの「(4)世界と日本 ア世界の地域区分と地域」の項目の内容の取り扱いについて、「アジア、アフリカといった州、大陸以上の大きな地域」は取り上げないようにとの指示がなされている点である¹⁷⁾。「第三世界」や「南

の世界」といった捉え方による地域区分は、この項目からは除外されることになる。

【現代社会】現代社会では、「指導要領」に「南北問題などの世界的な課題¹⁸⁾」という表現が見え、また『解説』では「発展途上国などへの国際協力の必要性について認識させる¹⁹⁾」と述べており、南北問題、発展途上国への言及はある。しかし、「第三世界」という用語は使われておらず、ラテンアメリカなど具体的な地域への言及もない。

【政治・経済】「指導要領」の政治・経済分野では、「発展途上国の現状と動向、先進国と発展途上国との関係などについて理解させる²⁰⁾」とあり、『解説』において「発展途上国の著しい増加と発言権の強化...を理解させる²¹⁾」と述べ、「発展途上国の現状と動向」および「先進国と発展途上国との関係」の項に関して比較的詳しい解説が与えられている²²⁾。全般に発展途上地域、南北問題への言及は多いが、「第三世界」という用語や、ラテンアメリカへの直接の言及は見られない。

(3) 「指導要領」「指導書」「解説」におけるラテンアメリカという用語の不在

「指導要領」「指導書」「解説」を通じて「ラテンアメリカ」という用語がほとんど使われていない点は、今回の調査で印象的であった。唯一『解説 地理歴史編』の世界史Aの部分で、「1970年代の石油危機以降、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国の中に、不況、インフレ、累積債務などに苦しむ国々が目だつたことに着目させる」という記述が見られるのみである²³⁾。これに対して、16世紀以降に限ってみても、ヨーロッパ、アジア、アメリカ、アフリカといった他の地域概念を表す語は頻繁に使用されている。

これは一つには、「アメリカ」という用語に米国と共にラテンアメリカを含めて使用していることによる。しかし、このような用語法が厳密に守られているわけではない。例えば『解説』の世界史A「19世紀のヨーロッパ・アメリカ」の項の説明では、明らかに米国を指して「アメリカ」と記述したと同じ箇所「合衆国以外のアメリカ大陸の国々」といった記述が見ら

れる²⁴⁾。「アメリカ」という語にラテンアメリカも含める用法は、当のラテンアメリカでは見られるが、日本では一般的ではない。文部省の省令あるいは著作物に「ラテンアメリカ」という語を用いていないこと理由は不明である。

以上の文部省「指導要領」などの調査から、次のような点が指摘できる。

- ・文部省「学習指導要領」およびこれを解説した『中学校指導書』および『高等学校学習指導要領解説』には、「第三世界」という語は使用されていない。
- ・高校の「指導要領」および『解説』の世界史A、Bおよび政治経済の分野では、第二次世界対戦後の国際社会を、米ソあるいは東西両陣営の対立と、アジア・アフリカ諸国あるいは発展途上国の台頭という構図で理解していると考えられるが、このような構図の中でのラテンアメリカの位置づけは不明である。
- ・教科書の「第三世界」記述のばらつき、ラテンアメリカの位置づけの不明確さなどの点は、「指導要領」等における扱いに起因している面がある。
- ・一方、「指導要領」等に「第三世界」という用語は示されていないことから、記述のばらつきそのものは、執筆・編集者の立場の違いの現れだということができる。

6. おわりに

以上を要約し、重要と思われる点をまとめると次のようになる。

- (1) ラテンアメリカ事情教育において、学習者の多くは「第三世界」という概念を知らず、ましてラテンアメリカ地域を「第三世界」に含めて理解していない可能性が強い。
- (2) 「第三世界」という概念は、特に冷戦構造解体後、「第三の世界」

- あるいは新興勢力の連合といった意味を失い、単に「非先進地域」を指す言葉として使われつつある。
- (3) 「第三世界」という概念は、歴史の変化の中で、その意味も変化しており、また、使う者によっても意味するところが異なる。日本の教科書の記述は、このような変化や多様な解釈に、必ずしも対応しきれていない。
- (4) 日本の中等教育教科書では「第三世界」という概念を記述していない教科書も多い。しかし、これはこれで一つの立場であり、尊重すべきである。
- (5) むしろ、「第三世界」について記述している教科書において、その記述が必ずしも正確とは言えないものがある。「第三世界」概念にはラテンアメリカも含めるというのがラテンアメリカ研究者の間の共通した理解だと考えられるが、教科書の記述ではそうになっていない記述が多い。
- (6) 「第三世界」の記述にラテンアメリカを含めている場合には、カリブ海地域は別として多くの国々が既に19世紀初頭に独立国家を形成していたという歴史的事実が理解しにくく、誤解を与えかねない記述が多い。
- (7) 「第三世界」記述およびそこでのラテンアメリカの扱いに見られる以上のような問題は、それぞれの教科書の執筆、編集上の責任の範囲での問題といえるが、同時に、日本の教科書が準拠することを義務づけられている学習指導要領において、現代史上のラテンアメリカの位置づけが不明確であることに起因している部分もあると考えられる。

ラテンアメリカ理解はこうあらねばならないという絶対的な基準は存在しない。特色と個性をもったさまざまな教科書が存在することは歓迎すべきことである。しかしながら、今回の調査を通じて、日本の学校教科書が

その「第三世界」記述を通して提示しているラテンアメリカ像に、是正されるべき点のあることを強く感じた。多くの場合、現行の日本の学校教科書記述からは、19世紀以降現在までのラテンアメリカの歴史像、あるいは世界の歴史におけるその位置づけが浮かび上がってこないのである。ラテンアメリカに関する記述そのものが絶対的に少ない例も多い。

冒頭で述べたようにラテンアメリカ地域研究とラテンアメリカ事情教育とは、相互に刺激しあひ学びあうことによって、それぞれの領域の発展が進められていくような関係にある。だとするならば、ラテンアメリカ事情教育の中で重要な意味を持つ学校教科書の記述が現在抱える問題点について、ラテンアメリカ地域研究者、そしてその組織であるラテンアメリカ学会としても関心を持ち、大いに議論し、しかるべき対応を行っていく必要がある。

謝 辞

本研究のための資料の収集にあたっては常葉学園大学附属図書館、宮城教育大学附属図書館、財団法人教科書研究センター附属図書館を利用させていただいた。また、教科書制度等について財団法人教科書研究センターの細野二郎氏に貴重な御教示をいただいた。これら機関、個人の方々に誌面を借りて感謝申し上げる。なお本稿の一部は、ラテンアメリカ学会第16回定期大会（平成7年6月17日、於東京大学）で口頭で発表した。貴重なコメントをいただいた方々に改めて感謝申し上げる。ただし、本稿の内容に関する全ての責任が筆者にあることはいうまでもない。

註

- 1) 「ラテンアメリカ」という地域概念が成立し得るのかという疑問も当然存在する。しかし、ここでは先ずアジア、アフリカ、などといった地域概念のレベルについて学校教科書がどのような扱いをしているのかということを取り敢えず調査することが目的であり、この点には立ち入らない。また、ラテンアメリカという語の使用は、カリブ海地域も含めた慣用的な用法による。
- 2) Allen H. Merriam, "What does 'Third World' mean?" in Norwine, J. & A. Gonzalez, eds., *The Third World: States of Mind and Being*, (Boston: Unwin Hyman, 1988) p.20.; Kofi Buenor Hadjor, "Introduction," *The Penguin Dictionary of Third World Terms*, (London: Penguin Books, 1993) pp.10-11.; Paul Harrison, *Inside the Third World: the Anatomy of Poverty*, 3rd ed., (London: Penguin Books, 1993), pp.451-452.
- 3) 「通常の用法において〈第三世界〉とは広く非西洋地域の名称であるらしい。しかし、当然日本は先進国の仲間入りをした故に、除外される。つまり〈第三世界〉とは具体的に日本以外のアジア諸国、中南米諸国、アフリカ諸国を指す。これらの多様な地域が共有する唯一の特徴は、植民地であったということだ。〈第三世界〉とは、〈先進国〉の発展と共に生じた歴史的産物にほかならない。こう考えてみると〈第三世界〉という枠組は、あまりにも貧困である。ヨーロッパ諸国が帝国主義政策に基づいて作成した〈国境〉と〈有色劣等民族〉像は、〈第三世界〉の人々から歴史と文化を奪い、数々の固有な社会を同一化して見せているにすぎない。日本人はこの単一化されたイメージの〈第三世界〉を実態として捉えることがあまりにも多すぎる。」ジョン・リー「〈第三世界〉という幻像」『現代の理論』222号(1983年2月) pp.67-68.
- 4) 小田 実「〈途上国〉と〈第三世界〉」『法学セミナー』No.362(1985年2月) pp.16-19.
- 5) 新村出編『広辞苑』第4版(岩波書店, 1991年)
- 6) 「第三世界」『世界大百科事典』(平凡社, 1988年)
- 7) "Third World", *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed., 1989.
- 8) OEDはさらに, "Third World"という語の語誌を例を挙げてたどっているが, その中に挙げられているA.A.Mazruiによる, *Journal of Politics*誌上の論文での次のような使用例はその典型である。「人類のうちの経済的に恵まれないセクターという意味での第三世界概念は, アジア・アフリカ諸国と共にラテンアメリカも含むべきである。しかし本論文では, この第三世界という語を, より限定的な意味, すなわち新たに独立した国家がなす世界という意味

で用いることにする。」同上。

- 9) これらの点は、地理学者A. ゴンザレスが、「第三世界」の中でラテンアメリカが持つ特徴として指摘していることである。「南アメリカは低開発世界の中で最初に独立を達成した地域であり、同時に、中部アメリカと共に、低開発地域の中で唯一、ヨーロッパの言語と宗教を受容・保持し、また、多くのヨーロッパ系住民を擁する地域である。」Alfonso Gonzalez, "South America: the worlds of development," in Norwine, J. & A. Gonzalez, eds., *The Third World: States of Mind and Being*, p.184.
- 10) 日本の学校教科書は、指導要領の改訂に伴い、小学校から高等学校高学年用まで段階的に検定、採択使用開始が進められていく。現行の学習指導要領の場合、平成元年（1989年）に施行され、これに基づいて、中学校用教科書は平成3年（1991年）に検定済となり、平成5年から使用が開始されている。また、高校用教科書は、平成4年（1992年）より順次検定済となり、平成6年（1994年）より順次、使用が開始されている。このように、学習指導要領の改訂が準備され、実際にそれに準じた教科書が使われるようになるまでには、5年以上の時間的ずれがある。「第三世界」という概念については、1989年から1991年にかけてのソ連・東欧の社会主義体制の崩壊による冷戦構造の解体を抜きに論ずることはできないのだが、そのような急激な世界の政治情勢の変化が学校教科書の記述にすぐに反映され得るものではない点には、注意しなければならない。
- 11) 文部省初等中等教育局『教科書制度の概要』（平成5年3月）pp.6-7.
- 12) 文部省『中学校指導書社会編』（大阪書籍, 1989年）pp.84-85.
- 13) 文部省『高等学校学習指導要領（平成元年3月）』（大蔵省印刷局, 1989年）pp.26,44.
- 14) 文部省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（実教出版, 1989年）p.36.
- 15) 同, p.74.
- 16) 同, pp.78-79.
- 17) 同, pp.41-42.
- 18) 『高等学校学習指導要領』p.47.
- 19) 文部省『高等学校学習指導要領解説 公民編』（実教出版, 1989年）pp.38-39.
- 20) 『高等学校学習指導要領』pp.48-49.
- 21) 『高等学校学習指導要領解説 公民編』p.83.
- 22) 同, p.84.
- 23) 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』p.36.
- 24) 同, pp.28-29.

調査対象教科書一覧（著作者名は省略した）

中学社会 地理的分野 平成4年文部省検定済 平成6年発行

日本書籍	中学社会 地理的分野
東京書籍	新しい社会 地理
大阪書籍	中学社会〈地理的分野〉
中教出版	中学生の社会科 世界と日本の国土〔地理〕
学校図書	中学校社会 地理
教育出版	新版 中学社会 地理
清水書院	日本の国土と世界 中学校社会科地理的分野
帝国書院	中学生の地理世界の人人と日本の国土〈最新版〉

中学社会 歴史的分野 平成4年文部省検定済 平成6年発行

日本書籍	中学社会 歴史的分野
東京書籍	新しい社会 歴史
大阪書籍	中学社会 歴史的分野
中教出版	中学生の社会科 日本の歩みと世界〔公民〕
学校図書	中学校社会 歴史
教育出版	新版 中学社会 歴史
清水書院	日本の歴史と世界 中学校社会科歴史的分野
帝国書院	中学生の歴史日本の歩みと世界の動き〈最新版〉

中学社会 公民的分野 平成4年文部省検定済 平成6年発行

日本書籍	中学社会 公民的分野
東京書籍	新しい社会 公民
大阪書籍	中学社会〈公民的分野〉
中教出版	中学生の社会科 現代の社会〔公民〕
学校図書	中学校社会 公民
教育出版	新版 中学社会 公民

清水書院	日本の社会と世界 中学校社会科公民的分野
帝国書院	中学生の公民日本の社会のしくみと世界<最新版>

高等学校地理歴史科用教科書 世界史A 平成5年文部省検定済 平成6年発行

三省堂	明解 世界史A
清水書院	新世界史A
山川出版社	現代の世界史
一橋出版	世界史A

高等学校地理歴史科用教科書 世界史B 平成5年文部省検定済 平成6年発行

東京書籍	世界史B
東京書籍	新選世界史B
実教出版	世界史B
三省堂	世界史B
帝国書院	図説 世界史B 最新版
山川出版社	詳説世界史
山川出版社	世界の歴史
一橋出版	世界史B
第一学習社	高等学校新世界史B

高等学校地理歴史科用教科書 地理A 平成5年文部省検定済 平成6年発行

東京書籍	環境と人間—地理A—
教育出版	地理A
帝国書院	高校生の世界地理A 最新版
二宮書店	現代世界のすがた 地理A

高等学校地理歴史科用教科書 地理B 平成5年文部省検定済 平成6年発行

東京書籍	地理B
実教出版	地理B

三省堂	詳解地理B
教育出版	地理B
清水書院	現代地理B
帝国書院	新詳地理B 最新版
二宮書店	詳説新地理
第一学習社	高等学校新地理B

高等学校公民科用教科書 現代社会 平成5年文部省検定済 平成6年発行

東京書籍	現代社会 未来をみつめて
実教出版	現代社会
三省堂	現代社会
清水書院	高等学校 新現代社会
帝国書院	高校生の新現代社会 最新版
山川出版社	現代社会
数研出版	高等学校 現代社会
一橋出版	新高校現代社会
第一学習社	高等学校 現代社会
東京学習出版社	現代社会
学習研究社	高校生の現代社会

高等学校公民科用教科書 政治・経済 平成5年文部省検定済 平成6年発行

日本書籍	新版 高校 政治・経済
実教出版	政治・経済
清水書院	新政治・経済
数研出版	高等学校 政治・経済
一橋出版	政治・経済
第一学習社	高等学校 政治・経済
東京学習出版社	政治・経済
学習研究社	政治・経済

参考文献

- 文部省『中学校学習指導要領(平成元年3月)』大蔵省印刷局, 1989年
- 文部省『高等学校学習指導要領(平成元年3月)』大蔵省印刷局, 1989年
- 文部省『中学校指導書社会編』大阪書籍, 1989年
- 文部省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』実教出版, 1989年
- 文部省『高等学校学習指導要領解説 公民編』実教出版, 1989年
- 文部省初等中等教育局『教科書制度の概要』(平成5年3月)
- 財団法人教科書研究センター『日本の教科書』(平成3年3月)
- 「6年度使用高校教科書の採択状況—時事通信社調査(上)(下)」『内外教育』(1993年12月10日) pp.7-14. (1993年12月24日) pp.6-12.
- エドモン・ジューブ, 高演義訳『第三世界』(白水社, 1991年)
- 小田 実「〈途上国〉と〈第三世界〉」『法学セミナー』No.362 (1985年2月) pp.16-19.
- 志柿光浩「日本事情とラテンアメリカ事情」『長崎大学外国人留学生指導センター年報』第2号, 研究論文編(1994年3月) pp.42-54.
- ジョン・リー「〈第三世界〉という幻像」『現代の理論』第222号(1983年2月) pp.67-73.
- 正井泰夫・細野二郎「教科書からみた日本とメキシコの相互理解」『筑波大学地域研究』2号(1984年) pp.33-42.
- 『地理』「特集: 第三世界と日本」第35巻第4号(1990年4月)
- Harris, Nigel, *The End of the Third World: Newly Industrializing Countries and the Decline of an Ideology*, London: Penguin Books, 1990.
- Harrison, Paul, *Inside the Third World: the Anatomy of Poverty*, 3rd ed., London: Penguin Books, 1993.
- Kofi Buenor Hadjor, *The Penguin Dictionary of Third World Terms*, London: Penguin Books, 1993.
- Norwine, J. & A. Gonzalez, eds., *The Third World: States of Mind and Being*, Boston: Unwin Hyman, 1988.